奈良・藤原京条坊関連遺構

1 所在地　奈良県橿原市葛本町七六九番地
2 調査期間　一九七九年（昭54）八月～十月
3 発掘機関　奈良県立橿原考古学研究所
4 調査担当者　中井一夫・松田真一
5 遺跡の種類　道路及びその側溝
6 遺跡の時代　七世紀末～八世紀末
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

奈良県橿原市葛本町南半地域は、弥生時代末～中世にかけての遺跡として二度にわたる発掘調査が行われている。それは、弥生時代末～古墳時代前期及び中世の集落とすでに破壊されてしまった古墳（一辺約40mの方墳）の検出という成果をあげている。今回の調査はこれの北限ないしは西限を確認するために行われたものであるが、検出した遺構の性格の検討から、下明寺遺跡なる遺跡名をこえる範囲を持つものであろうと考えられるので、表記のごとき題とした。

検出した遺構は、幅約八mで両側に側溝をもつ南北道路と、これに直交し同じく両側に側溝を有する幅約六mの東西道路である。この道路は、現在も明確に存する条里地割とは一致しない。周辺にこの道路遺構と関連する地割を求めるならば藤原京以外になく、橿原市都市計画図（二千五百分一）で検討すると、南北道路は、藤原京西一坊大路の北延長線に一致し、東西道路は、藤原京北京極より北へ四条半の地点にあたる。道路規模のちがいは、大路・小路を表わしていると考えられることから、この検討から得られた結果と一致する。木簡が出土したのはこの南北道路の東側溝からである。側溝は道路交差点部で底が浅くなる他は、すべての部分で規模はほぼ同一である。幅約一m・深さ約〇・五mを計り、溝内堆積土は大きく三層に分けられる。上層は砂層で八世紀後半の土器を含む。中・下層の遺物を時期的に分けることは困難であるが、中層が砂を含むのに対して下層は粘質である。木簡はこのうち下層から出土した。木簡の他には、斎串・人形等も出土した。

8 木簡の釈文・内容

木簡は短冊型の下部であると思われるもの一点を検出した。

□鉏（マヽ）」　010

9 関係文献

「藤原京条坊関連遺構の調査」（奈良県立橿原考古学研究所編『奈良県遺跡調査概報一九七九年度』）　一九八〇年

（中井一夫）